

講演

儒教から見た現代

—孔子を通して—

加地 伸行

一、はじめに

◆人類の叡智を教える必要性

ただいまご紹介をいただきました加地でございます。本日大阪から新幹線で東京に参りまして、上野から常磐線で来ましたが、電車の中で、たまたま私の前に座っていた若い女性のすごい状態に驚いてしまいました。その女性は左手で文庫本読んでいました。本を読んでいる若い女性、今どきなかならないかと思って見ていたら、その女性は本を読みながら、なんと右手の携帯電話でメールを打っているんです。驚いたのはそれだけではありません。両方の耳にはイヤホンが装着されて音楽も楽しんでるではありませんか。音楽を聴きながら、文庫本を読み、一方ではメール打っているんです。更に、それだけではなく、膝の上にポッキーを置いて時々食べていました。もう五感の全部を使って、まことに忙しい女性の実態を垣間見た次第ですが、どれか一つに集中したらいいと思うのですが、これが現代の若者像の一端なのでしょうか。

今の若い方は、若い方のセンスでやっておられるので、我々老人とは大分ズレがあるなあとこの

とを実感した次第ですが、そういう若い方々を我々あんまりなじったり、単に批判してはいけなと思うことがあります。我々老人は若い方々に何を教えてきたかというのを問う必要があると思うからです。実は、何も教えてこなかったのではないかと。若い人はいろんなことを知らないんです。あまりにも知らない。その知らない人に対して知らないからといって怒る方が間違いです。ちゃんと教えて、それでよくなければ叱る、これなら筋が通っていますけど、こちら側が教えもしないで、「あいつ何も知らん」といつて怒るのは筋違いというものです。我々老人はやっぱ積極的に若い人にもいろいろと問いかけたり教えたり、知らないことを学んでもらうべきだと思います。そういうことをこれから特にやっていかなきゃいけないのではないかと、このことを痛感しています。

それでは何を教え、学んでもらうかと言うと、例えば加地伸行の浅知恵ではダメです。そういう話をしましても、これは効き目はありません。また説得力も乏しいものです。しかし、我々人類の長い歴史の中で、長い時間をかけて積み重ねてきた知恵といえますか、この人類の叡智を教えることについては若い人も納得するだろうと思います。我々人間が積み重ねてきた知恵というものを話かけていくべきじゃないかと、現代社会の実相を眺めて、つくづく思うわけです。

◆狼の知恵

ある動物学者から聞いた話ですが、狼というのは、穴を掘って巣づくりするわけですが、特に妊娠をした母親になる狼は、子供が生まれることが分かりますと、更に深く掘るといいます。普通の二倍くらい深さに掘るようです。そして一番奥まったところで出産をするという習性をもっているようです。

なぜそんなことするかと言いますと、まず一つは安全ということですが、しかし、深いほうが安全だというだけではなく、そこで生まれた狼の赤ちゃんの視神経を鍛えるために必要な教育環境であるというわけです。

ある動物学者から聞いた話ですが、狼というのは、穴を掘って巣づくりするわけですが、特に妊娠をした母親になる狼は、子供が生まれることが分かりますと、更に深く掘るといいます。普通の二倍くらい深さに掘るようです。そして一番奥まったところで出産をするという習性をもっているようです。

なぜそんなことするかと言いますと、まず一つは安全ということですが、しかし、深いほうが安全だというだけではなく、そこで生まれた狼の赤ちゃんの視神経を鍛えるために必要な教育環境であるというわけです。

狼たちは夜行性ですから獲物を獲るためには眼がよくなければ駄目です。それを母親は、自分の巣を奥深く掘ることによって自然に教育して、やがて独り立ちしていく子供のための教育をきっちりやっているわけです。これは狼の持っている基本的な生きる知恵と能力と言えます。

赤ん坊の狼が、成長してきますと、ものを見ようとしています。その時には、光のあるほうを見ます。穴の奥から見る光は、小さくて見え辛いと思われれます。赤ん坊の狼は見よう見ようと思つて、非常に深いところでこのポツツと見える小さな光を一生懸命見ていくうちに視神経が発達して、眼の力が強くなり、やがては巣立ちの時に、一人前の能力を身につけた狼となっていくことができます、ということです。これは長い間に蓄積された狼たちの持っている知恵で、狼の子育てのなすべき重要なことであるわけです。しかもそれは自分だけで考えた知恵ではないのです。

ですから我々も若い人々には、我々が受け継いできた知恵を授けていく、教えていく、これは若い人も素直に受けていくだろうと思います。それではどういふ知恵を教えるかということになります。我々は日本人でありますから、日本の歴史や文化というものに関わる知恵ということをお話させていただきます。それは当然のことです。そして、その中の一つがこの儒教であると、私は思います。勿論他にもいくつもの知恵があるわけですが、「儒教の知恵」を教えることは、我々の義務ともいえる重要なことだと思つていいです。儒教の中心人物であり、その儒教の骨格を作り直した人として、孔子の教え、孔子の言っていることを、我々は人づてにしつかりと伝えていく必要があるかと思つています。

二、儒教の東北アジアにおける価値

◆個々の民族を越えた共有財産

最近こういう質問がありました。孔子は中国の人じゃないかと。中国人の考えていることをなぜ日本人が学ぶのかということをおっしゃる方がおりましたが、それは間違いです。というのは、なるほど孔子は確かに中国人です。間違いありません。しかも今から二五〇〇年前の古代の人であります。ところが、その二五〇〇年前の中国という土地にたまたま生まれた人ではありませんが、その人が述べてきたことがいつのまにか人々から人々に伝わって、広がり広がって、中国・朝鮮半島・日本という東北アジア全体の共通の財産となってきた。ですから、それは中国人の言っていることというのではなくて、むしろ、東北アジアの我々が共有している財産であるという認識が必要だと思います。これは、欧米人の場合におけるギリシャ神話や新約聖書もそうであって、ギリシャという小さな地域で生まれたギリシャ神話は、時代を経て欧米の人々の間において読み継がれ、欧米人たちの共有の財産になっています。

また、キリスト教が興って以来、その新約聖書というものはヨーロッパ、あるいはアメリカにおいて非常に広く深く読まれ、信仰となって広まり、個々の民族を越えた大きな共通の財産となってきたわけです。そういうふうに「古典」というものを考えるべきであろうと思っております。

私はこの孔子を通して学ぶこと、孔子の言葉を集めた論語というものから我々はいかに共有の財産を学んで行くか、そのなかの知恵を読み取っていくべきか、非常に大切なことだと思っております。これは欧米人たちがギリシャ神話や新約聖書を一生懸命読んでいたのと同じことであろうと思えます。

◆仏教は普遍宗教ではない

というふうに私が申しますと、またどなたか必ず反論して、「仏教が落ちているじゃないか」とおっしゃいます。確かに私は仏教を敢えて申しませんでした。なぜかと言いましたら、世界中におきま

して仏教というものが生きているのは日本だけだからです。宗教学概論として、世界には三大宗教としての普遍宗教があり、キリスト教とイスラム教と仏教が挙げられています。普遍宗教を世界のどこにでも通用するという意味として把握するならば、仏教は普遍宗教とは言えません。仏教は世界的にはもう生きていない。

キリスト教とかイスラム教はかなり広範な場所に広がっていて、今も生きていると言えますが、仏教は普遍宗教とは言えない状況にあり、極端な見方をすれば、今や、日本と東南アジアとにしかないと言えます。インドにおいて仏教はほとんどありません。インドの人口が大体八億人から九億人と言われていますが、そのインド人の中で、仏教徒は一五〇〇万人くらいです。中国はどうかと言えば、仏教信者はほとんどおりません。また韓国はどうかと申しますと、この国も仏教徒は殆どいません。

◆なぜインドから仏教は消えたか

なぜか。まずインドで仏教というものがなぜなくなっていったかと言いますと、いくつかの理由があります。一つの理由は十三世紀ごろイスラム教徒が乗り込んで来て、壊滅的侵略を繰り返してきました。数年前に起こったアフガニスタンにおける、あのガンダーラの仏像破壊は象徴的な出来事です。イスラム教徒は偶像崇拜を許しません。仏像という偶像崇拜は絶対に許されないことであつたわけです。

十三世紀にインドの大半を占領したイスラム教は仏教を否定していきましましたが、それだけではなく、インドにおける仏教自体に問題がありました。すなわち仏教が「平等」を説いたところにあつたと言えます。これは差別発言ではなく、歴史的事実として捉えていただきたいと思えます。誤解なきように願います。仏教は平等を説いたがゆえに初めは人々に受け入れられましたが、後にその思想はインド社会に受け入れられない状況になっていきました。何故か。これにはインドの特別な事情があ

るわけです。

インドは人口が多い。お釈迦さんの頃も多かったと思われれます。多い人口の基本的な問題は、どうやって食べていくかということ、このことは非常に難しい問題となるわけです。多くの人々が食べていくということ、それぞれが職業を持ち収入を得るということ、日本では想像も出来ないインド社会の貧しい現実があります。インドの貧しさ、その貧しい現実を生きるための社会的な知恵として、カースト制度が出来上がったと言われています。元は四階級だったものが、今は一五〇くらいの制度となっていると言われています。

いろんな人と結婚して、いろんな人ができ、カーストという身分制度が出来、その身分制度に応じていろいろな職業がその身分制度と連動して生まれてきました。たとえば、このカーストの人はこの職業だけが自分の生きていく方法であると規制され、他のカーストの職業に就くことはできないことになっています。なぜなら、もし能力のある人がいろいろな仕事にまで進出しましたら、その職業についている人たちは競争に敗れるでしょう。いわゆる生存競争に負けてしまつて飢え死にしてしまふ。ですからそのカーストは他の職業には手を出さないということにしています。仕事はたくさん種類に分かれますから、そう簡単に区分けが出来ない場合もあるようですが、たとえばその一例として、このようなことが起こり得ることなどご理解いただけるのではないのでしょうか。

◆カースト制度の知恵

私の友人がかつてインドの北の方に遺跡の発掘調査に行きました。約一ヶ月の予定で行きましたが、現地に行つたら多くの樹木が生え繁つており道がない状況だったようで、探検隊がいるベースキャンプから遺跡まで約一〇〇メートル程の道を作らせたわけです。一〇〇メートル程度ですが、どうしても必要ですので、まず道づくりからとりかかりました。工事はインド人の親方に請負させ、工事

代金を渡して、道づくりを要請しました。するとインド人の親方は、仕事は大体まあ十日ほどかかるだろうということをつたえたそうです。なんでそんなにかかるかと言つてましたが、十日かかるかしかならず、任せるしか仕方がない状況になつたそうです。

第一日目。インド人の親方が人夫を二十人連れてきました。もし日本人の親方だったら二十人連れてきた人夫を全員投入して道づくりに取りかかるでしょう。そして、あつという間に二日くらいで作り上げるのではないのでしょうか。ところが、インドのその労働者達は二十人来ましたものの、二人だけ働くというんです。第一日目、二人がバッサバッサいららするくらいの人びりとした調子で木を切るらしいのです。残る十八人何をしているのか。横に転がつて昼寝しているというんです。私の友人は責任者ですからいらいらいらしながら、なんで十八人は働かないのかと思うのですが、請負だから仕方がないと、様子を見てみると、その日が暮れて全員帰つた。

二日目、また同じメンバー二十人がやつて来ました。するとまた今度は三人くらいが、石をごろんごろん退けはじめました。あと残つた十七人はまた昼寝をしている状況です。朝からずっと寝転んでいるんです。毎日そうやつて十日間の仕事を十に小分けにして、人夫は二、三人ずつが仕事をし、あと残りのものは、仕事をしないで寝転んでいる。毎日現場に来て、働かなくても日当をもらつていてという事です。

なぜこのようなことが起きるか、日本では考えられないことですが、その理由は、カースト制度にあります。親方は土地の人ですから、二十人のそれぞれのカーストを知つてるわけです。その二十人のカーストをグループとして十段階に分け、その十段階に分けた人夫を二人とか三人ずつくらいにチームにし、一日に二人とか三人ずつ働かせて十日間の収入を全員に渡すという仕組みのようです。

そのカーストによって仕事を小分けにしている。これがインド社会の知恵となっているようです。そのカーストに応じて仕事を振り分けて、みんながそれぞれ食べていけるようになっていく。これが

インド社会であり、インドの人々なのでしよう。日本のように能力主義なんて言って、仕事をしていたら、体も頑丈だ、頭もよく回る人間が仕事を一人占めしてしまい、他の人間の仕事がなくなつて餓死しかねないということになってしまふ。餓死させないように皆で仕事を小分けにするという知恵が、インド社会の制度となつてきているわけです。

◆通用しない「平等」思想

そうすると、インド社会にはカーストというものがなくてはならないことです。逆に「平等」という思想は通用しない。だから平等を説いた仏教というのはインド人から捨てられていったというわけです。

今のインド人の宗教の中心であるヒンズー教はカーストを認めています。今わが国では「平等、平等」と言いますが、インドで全然通用しないことを事実として把握していただきたいと思えます。

そして、インド社会の中で、どのあたりの階層が仏教徒となっているか、仏教を信ずるかといったら、カースト以上のものなかにほとんどいません。カーストの下の、アンタツチャブル、不可触賤民、触るべからざる賤しい民というひどい差別をされている人たちが仏教徒であるのが実態です。

◆中国や朝鮮半島の仏教

中国はどうか。今の中国は共産主義国家ですから、元来宗教を認めていません。若干最近復活していますが、それでも其の復活は難しいでしょう。何故かと言えば、中国人の仏教徒は日本人の仏教徒と全然違い、仏教徒になつた瞬間に肉食を一切しません。動物系は一切口にしません。戒律を厳しく守ります。出家した僧侶がそのような厳しい戒律を守るだけではありません。一般の信者もそのようなです。信仰として一切殺生はしないことを徹底しているのが中国人の仏教徒です。ですから仏教徒は

増えません。人間の欲望のなかで、食欲は最も基本的なことで、やはり肉を食べたい、魚を食べたいという欲望に打ち勝つ厳しさが必要になります。従つて仏教徒が増えないのは当然のことと言えます。

国家政策において仏教は基本的には弾圧されていますが、仏教信者のあり方そのものが前述のように日本と全然違つていて、信者になるには相当の決意が要するというのもあつて、中国には、現在仏教徒は殆どいません。僧侶は若干おりますが、それはごくほんのわずかしきません。また、勿論日本のような檀家制度もありません。

では、朝鮮半島はどうか。これは歴史的に明らかですけれども、李氏朝鮮の歴史をたどれば、李氏朝鮮は二二九二年、今から六〇〇年前にできています。その李氏朝鮮時代の五〇〇年の間、儒教原理主義を徹底し、仏教を弾圧しています。仏教寺院を全部潰していると言つていいほどです。現在、新羅時代の遺跡のあるお寺などは若干残つてますが、あとの普通のお寺は全部叩き潰したり、焼いてしまつています。

ですから李氏朝鮮時代、朝鮮半島における仏教者はみな山の中に入って、山寺で仏教の伝道を細々と続けていました。現在、朝鮮半島にあるお寺のほとんどは山の中にあります。平野部にあるのは日本時代に出来たお寺です。ですから五〇〇年間弾圧された朝鮮半島の仏教徒はほとんど残っていないと言えます。

◆日本仏教は事実上「儒教」

東北アジアでは、仏教は日本しかないのが実情です。普遍宗教と言われていますが、しかし、その日本における仏教の中身の一〇％くらいが、インド仏教であり、その他の一〇％くらいが道教（中国から生まれた宗教）です。そして、あとの八〇％が儒教です。今の日本仏教は、儒教八〇％、インド

仏教一〇%、道教一〇%の割合であると認識いただければよいと思います。日本仏教はインド仏教とは別の宗教です。それをみんな間違えて仏教、仏教と言っていますが、正確に言うならば、日本の坊さんは日本仏教の僧侶と言うべきでしょう。仏教と言うとみんな勘違いしてインド仏教も日本仏教も中国もみんな一緒くたにしていますが、内容が全然違うのです。

そして、日本仏教のなかの八割は儒教だと言うことも知るべきです。日本仏教は事実上は儒教とも言えるものなのです。そういうことを考えますと、いわゆる原始仏教はほとんどなく、現在、機能していないと言えます。これはなにを意味しているかというところ、キリスト教の場合は新約聖書という世界のベストセラーがあります。儒教の場合は論語という世界的ベストセラーがありますが、仏教には、それらに相当するものがありません。今仏教で、日本人の誰もが共通に読んでいる仏教の経典があるかと問われれば、ありません。論語や新約聖書ほど読まれているものはありません。仏教の各宗派でそれぞれ仏典があると言っても、それは限定的なものであって、仏教という広い視野に立つての共通に読まれている経典なんてどこにもありません。仏教が世界的に普遍的ではないという事実を申し上げます。

三、論語は倫理を意味する

◆日本独特の正しい教育技術「素読」

ところで、東北アジアにおけるベストセラーで今も読み継がれている論語について少しお話ししておきたいと思っています。東北アジアの共産主義国家においても読まれています。もちろん朝鮮半島でも広く読まれています。わが国でも論語は依然としてよく読まれており、また、孔子という人を知るには論語が一番です。

そこで今日はまず、この論語について話をさせていただきます。最近、「声に出す国語」とか何とか言つて、素読をもっとしつかりすると国語の力が付くと言ったりして、素読が大事な教育法であるというようなことを言っていますが、いくら小さな子供でも音だけでわけの分からないこと言われても覚えられません。音声だけを聞いて、それを楽しいなど思う子供はいません。やっぱり意味が分からなければついてくるはずがありません。素読はいきなりするものではないのです。

江戸時代、明治の初めの頃まであった寺子屋においては、最初に子供たちが来ましたら、まず基本的な「いろはにほへと」から教えました。そういうことから学んでいきます。そして「い」はこういうふうにかくとか、「ろ」はこう書くというふうにならば、先生は「いろはにほへと」を「色は匂えど散りぬるを」という意味として読み、それがなにかを教えこんでいきます。単に「いろはにほへと」という音声だったものに意味が付け加わることになるわけです。そういうことをまず基本的に学んだ後に、短い単語の初歩を勉強して、その後に素読が始まっていくのです。いきなりの素読は行いません。素読をするときには、同時に意味を教えながら行ったというのが、日本独特の教育技術なのです。

◆呉音と漢音

「論語」についても、その読み方が違っていることを紹介しましょう。大阪弁で読む「ろんご」と東京弁で読む「ろんご」はアクセントが違います。同様に「はる・なつ・あき・ふゆ」も東京弁と関西弁ではアクセントが全く反対となっています。この「論」という漢字を現代中国語ではどのよう

に読むか。「ろん」と下さがりに読むときには、議論をする、「論議がある」とかの議論の「論」で、あれこれ言う、つべこべ言う、というのを「論」と読みます。中国語で議論とかそういう場合

は尻下がりで「ルン」と読みます。しかし「論語」の場合だけその「ろん」はお尻を上げて読みます。それは「倫」という意味になります。この「倫」の意味がそこに重なっていきますので、「ろんこ」と東京弁式に尻下がりに読んではいけません。お尻を上げて関西弁風に読まないといけません。

江戸時代には、「論」を「倫」（りん）と読んだのです。「ろんこ」の「ろん」と読まず、「りん」と読んでいました。そうすると、この文字を「りん」と読んだ瞬間に、その「倫理」の「倫」がイメージされ、「仲間」という本来の意味のイメージが重なっていくわけです。これを普通といえます。この普通は語呂合わせと同じで、我々の生活の中にごく普通に出てくるものです。

ところで漢字の音には二系列あります。日本語で読む場合、呉音という系列と、漢音という系列があり、もう一つ宋音というずっと後に入ってきた音がありますが、まず、呉音について見ていきますと、最初に日本に輸入された発音で、仏典にはこの呉音が多く入っており、奈良時代には呉音が圧倒的でした。ところが、平安時代に菅原道真が出てきて、彼が「仏典など仏教関係のものを読むときは呉音で読め」と。そして「中国の漢籍、それを読むときは漢音で読もう」というふうに彼がルールを作り改革を行いました。

このように漢字には音の系列として呉音と漢音とがあります。「語」を「こ」と読むのは呉音で、漢音で読むと「ぎよ」と読みます。菅原道真以来、漢籍は漢音系に読むのを原則としていますので、江戸時代の漢学者は「論語」を「りんぎよ」と読んでおります。また、例えば「般若心経」も仏教関係では「経」を「きょう」と読みますが、これは呉音で、私たちは読むなら一般的には、漢音で「けい」と読みます。これは一種の我々業界の問題ですけれども、漢文屋はそういうふうに読みます。

従って、江戸時代の素読は「論語」を「りんぎよ」と読んでいました。耳で聴いている子供達はこの文字を「りん」とか、「ぎよ」とかと習います。素読では「論語」を「りんぎよ」と読みます。

◆「あなつのたまわくまなびてつねに……」

それでは「子曰」をどう読むか。「し いわく」でいいじゃないかと答える人は、それこそ「まぐり」です。三歳や四歳、五歳の子供に、「子曰」と言っただけ分かりますか。分かりません。この「子曰」というのは孔子のことですよということをお母さんに教えないといけないわけです。教えないければ誰が言っているのかわけがわかりません。そこで孔子という文字の意味を学び、どう読むかを教えていくのです。「孔」は「あな」という字です。「子曰」というのは中国語で「ツ」と言います。そこで、「孔子」のことを「あなつ」と読ませていました。「面子が無い」という「めんつ」は「子曰」を「つ」と読みます。孔子のことは耳で聴いて分かるように「あなつ」と読み、「あなつ」と読んだら、それは孔子のことですということになっているわけです。

また素読の時、「曰」を「いわく」とは読みません。「あなつ」（孔子）といえど当時によれば尊敬すべき孔子のことですから、敬語表現で言わなければならぬと、子供達にそう教えないければなりませんので、「のたまわく」というふうに読み教えていました。「子曰」は「あなつのたまわく」というふうに読み、「学而」（まなびて）「時習之」（ときにこれをならう）と続いでいきますが、「ときにならう」となると、子供はみな、勉強はするけど、まあ時々おさらいするものだと一〇〇%が誤解をするので、「時二」を「つねに」と読ませています。これは勉強をしたらおさらいをする。それは時々ではなく、必ず毎日しなければならぬ。時々では困るわけです。だからこのことを子供達に注意しなければいけない。ここはお前しっかりやらなければいけないぞ、という大事なところを強調しています。とにかく勉強したら、物事を学んだらおさらいというのは絶えずしなければいけないことを徹底して教えているわけです。「まなびてつねにこれをならう」と読み、子供達はこの言葉を聞いていて、「あなつのたまわくまなびてつねに……」「おさらいをするんだな」というふうに内容を理解して

いくわけです。

普通、素読は平板に読みますが、ちょっと眠たくなります。そこで子供が寝てしまおうといけませんので、寝ないように、ここぞというときには声を大きくします。「りんぎよ あなつのたまわくまなびて、つ、ねにこれをならう」。つ、を強く読むことによって、聞いている方もハッと目を覚ますわけです。そのポイントを押さえることによって頭に入ることになります。

素読は本当は難しい教育法で、素読ができる人といったら中身を分かっていないといけませんし、中身を分かった上に、どこをしっかりと教えるかということを得ていなければいけないということなのです。声を出すことは結構ですが、子供達に、その言葉の中身を教えるんだというふうな意識の素読であってほしい、というのが私の願いでもあります。

昔は、素読には試験がありました。年齢は十七、八歳で、若者を対象に、素読の試験というのが行なわれていました。それは、読んでいて意味が本当に分かっているかどうか、素読した文章の簡単な意味が理解でき、その解釈が出来るかどうかを試す試験がありました。東京の中央線の「御茶ノ水駅」の向かい側に湯島の聖堂がありますが、そこにあった昌平塾は、東京大学や東京高等師範学校のルーツとなりますが、素読吟味という試験を行なっていました。

◆三文字一句の中国人リズム

さて、次にこの論語をどのように読み、取り組んでいるかを中国の例からご紹介したいと思います。中国人の読み方はリズム感で読んでいるわけです。漢文を読むとき、何かリズム感というのがないと眠たくなります。そこで、どこかで揺さぶる必要があるわけで、我々日本人にとって非常に参考になります。

一例を挙げますと、中国人にとっても論語はかなり難しいので、子供達が初めて勉強をする時は論

語から入らずに、初歩的テキストとして『三字経』（さんじけい）と言う子供達に教える初等教科書を使用しています。これも仏典なら「さんじきょう」と読むところですが、「さんじけい」と読みます。三文字一句でできている教科書です。

例えば「三字経」の冒頭は「人之初、性本善、性相近、習相遠」で、「人之初」は人の初めという出だしです。人が生まれたというわけです。次に「性本善」と、人が生まれたとき、その生まれつきの性質すなわち「性」は善であると、この生まれつきの「性」というものは、どの子供も皆同じような「性」、そして「性相近」。近くて皆同じだ。しかし「習相遠」。同じなんだけれども、そのあとの学習やいろんなこと、後天的なものによって、それぞれ皆遠ざかって別々になっていくということです。これは論語の言葉です。

なぜ三文字かと言いますと、三字というのは、音三つというリズムミカルな調子が取れ、中国語という一漢字一音で、三つの音が、「コンコンコン」とドアをノックするように三文字一句で中国人のリズムに合わせているのです。三つのリズムはビートが効いており、子供達に教える初等教科書として覚えやすくするために、こういうものを作ったのだと思われれます。子供のことから手を動かしながら、リズムをとりながら覚えるのです。

この三文字一句は論語の一節にも見られます。孔子が弟子に教えているところですが、三文字が並んでいます。「入則孝」（入りては則ち孝）、入るといのは、家の中、家庭にあつては両親に対して孝行を尽くさない。「出則悌」（出ては則ち悌）、出るといのは、家の外に出た場合には「悌」、「目上の人の言うことを良く聞きなさい。目上の人に敬意を払いなさい。そして「謹而信」（謹みて信）。偉そうにすることなく、謙遜して、真心を持って。そして「汎愛衆」、ひろく人々を愛して、「而親仁」、仁に近づけと言っている言葉があります。私が想像しますに、多分、孔子は気分が乗ったのでしょう。リズムミカルに「よく聞けよ」という調子で、「入則孝、出則悌、謹而信、汎愛衆、而親仁」

というふうに三文字一句でリズムミカルに言ったと思うのです。すると弟子達の頭の中にスーッと入ったのではないかと思われず。

このリズム感が三字経などになっていったわけでは、中国人はどちらかというリズムで言葉を切っているところがあります。それは彼らの言葉の感覚ですから仕方ありません。日本人にはちょっとそういうリズム感を持ってないところがあります。我々ほどどちらかというと、こういうリズムミカルな三文字一句とかたちで理解するのは難しく、内容で理解していく以外ないだろうと思っておりませんが、しいてこのリズムをつかんでいくとすれば、音声としてのリズムというよりも流れとしてのリズムをつかんでいくことではないかと思っています。

日本には短歌という素晴らしいものがありますが、あの「五・七・五・七・七」は、別にリズムミカルでもなんでもありません。何か気持ちの上でのリズム感みたいなもので、漢文を古文調で読むのは、中国人的な音声的リズム感とはまた違うものです。日本人と中国人にはそういう違いがあるということを押えておくと良いと思います。

四、人間中心の考えを基礎とした孔子

◆馴染めない宗教観の違い

それでは論語というものを材料にしました孔子という人がどんなことを考えていたか、それがどう現代につながるか。「儒教とのつながり」という限定的な視点ではありますが、いくつかのことをご紹介したいと思います。

まず何よりもこの孔子という人は、人間中心の考えを基礎としていいます。この世界は何によってできているかとかいうような存在論みたいなことにはあまり関心を持っていません。人間が中

心です。これが儒教の基本でありまして、人間をどう見るかということが九九%の関心事であるわけです。

理由は、この肉体のことを考えると一番よろしいかと思っています。少し乱暴な説明かと思いますが、キリスト教の場合と比べて見ると理解がし易いと思います。キリスト教の場合は、神すなわちエホバ、ヤーベという唯一最高絶対神が世界を作り、最後に土くんで自分の姿形に似せた物体をお作りなさって、ハッと息を吹きかけて人間をお作りになったという話です。ですからそのプロセスとして人間の精神は神と繋がって存在しているということは認めますが、肉体はただの土くんで、死ねば土に還っていく、それが人間だということにキリスト教では考えています。キリスト教では、肉体なんていうものは死ねば土になる、というふうに価値を置いていません。ですから臓器移植なんていう治療法は、体を土としか考えていないところからの発想で、欧米社会で外科が発達したのはそういう背景があったからではないでしょうか。人間の体を切り裂き、臓器移植が考えられたのも、そういう感覚からではないでしょうか。

それではインド人はどうか。インド仏教の考え方ですと、亡くなりましたら四十九日経ったら精神はどこかに生まれ変わるといふふうになっているわけでは、四十九日後にどこかに生まれ変わるといふ意味で、精神の存在を認めています。肉体は認めていません。肉体なんて夢幻じゃないかというのがインド仏教です。

我々日本人や中国人や朝鮮民族、東北アジアの人間は、人を見たら「ああ、この人は美しい」とか、「あの人は嫌な人だ」と外見で人を見たりしますが、インド仏教におけるインド的宗教観では「人を見たらその人の最期の姿を思え」とあり、人間はやがて朽ち果てて最期は骸骨になる。要するに「人を見たら骸骨と思え」ということです。本日、この場に六十人の骸骨が座っている、皆さんの顔の形は関係ない、皆さんは骸骨としてしか存在しないと云っているのがインド仏教です。もし今あ

あなたが東京駅を歩いたら骸骨の山の中を歩いているようなものとなります。これでは我々日本人にとっては馴染めない宗教です。また仏教は肉体は夢幻なるものとして、来世何に生まれ変わるか分からない。来世は虫になるかも分からない。何に生まれくるか知れないとする。そう考えたら私たちの身体ははかないものです。

◆儒教の世界観

では、儒教はどうかというと、肉体も精神の存在もともに認める。これが他の宗教と決定的に違います。精神も大事だが、肉体も大事だというのが儒教です。東北アジアの儒教の流れのなかにある我々にはそういう世界観があります。

なぜかというと、世界は神が創りたもうたという考え方が全然ないからです。世界は混沌としており、誰が創ったのか分からない。今の天文学で言えばガス状態です。ところが次第に時間が経つてくると、重いものは下に沈み、軽いものは上に上がっていくというふうに分かれていったんだというふうに考えています。例えば柔らかい肉も固い木も材料は一緒で、ただ分かれただけであるから、これは同じもので繋がっている。精神も肉体も混在しているというふうに考えるのが、これが東北アジアの基本的な考え方です。

例えば今の子供達に、体を指して「精神はどこにありますか」と言ったら、殆ど一〇〇%の子が「精神は頭、脳の中にあります」というようなことを言うでしょう。勿論欧米の人たちもそう言います。ところが、かつての日本人、朝鮮民族や中国人というのはそんなことは言わないわけです。「精神はどこにありますか」と言ったら、「この体全部に流れています」と言っていました。精神と肉体とが渾然と一体化されている、こういう心身観をもっていたのです。ですから我々の東北アジアにおける医学というのは徹底的に内科的です。外科的ではありません。

もし大腸が悪いとすると、大腸を司るある流れがあるんだ、その流れは精神がズーッとコントロールしているんだ、それがどこかで詰まっている。だからこの流れをよくしてやると大腸もきつとよくなります、という理論を立てています。大腸につながる体の流れはどんなものかというところ、スタートはツボとして人差し指から始まり、合谷というツボに入り、手の三里というツボを通つてずつと流れ、それが大腸に到達しているとなつていくわけです。この流れが悪いから大腸が悪くなつていくという思想です。

現代の医学だったら、もし大腸が悪い人は直ちにお尻から内視鏡で検査され、「肛門から六二センチのところはポリープがあります。取りますか、取りませんか」と、西洋医学ではそういう話になるわけですが、東洋医学だったら、ポリープがあつても、そのポリープを取るためには人差し指から鍼を打ちます。次に合谷に打ちます。三里に打ちます。というふうにして順番に氣の流れを矯正し、直接に大腸に処置をしなくても、氣の流れをよくすることによって大腸を治療するという理論です。

このようなことは日本人なら理解するでしょう。もし大腸が悪い人が、鍼灸師のところへ行つて「ここに鍼を打ちます」と言われると、「はいどうぞ」と、鍼を打つてもらったことになつた抵抗感がないと思います。ところが、これが欧米人だと理解できずに断わる確率が高いことが想像出来ます。大腸の悪いアメリカ人を連れて行って人差し指から鍼を打とうとすると「そこは大腸じゃない」「こへ打つてくれ」と、お腹を指し示すことでしょう。しかし大腸へ直接打つても効かない、その基となるところから打つていかなければいけない、と説明しても理解しがたいでしょう。考え方が全く違うわけです。東北アジアの我々は徹底的に内科的なんです。我々は臓器移植なんていうことには、ごく抵抗感を示します。身体に関わる考え方が全然違っていますので、肉体も大事、精神も大事というふうには渾然と一体化した感覚というものを大事にしています。だから今朝出会った女の子のよう、目は文庫本と携帯、耳はウォークマン、そして口はポッキーと、全感覚を使っていることはき

わめて儒教的と言えます。感覚を非常に大事にしている一例ともいえるかも知れません。

◆儒教的な感覚——世界は有限、空間も有限、時間も有限

儒教的な感覚について少しご説明をしたいと思います。ここに壁があつて天井がある。見える範囲内の感覚で、すべてのものを見ていこうとします。それが青空であり星空でありますが、それはすなわち「天」であり、目で見える範囲に天が広がっていると認識するわけです。そして人が立つているところが「地」です。この「天」と「地」とに区切られた空間が世界となるのです。我々は肉体を重んじるが故に、肉体の見える範囲を世界とするのです。この大地を踏みしめて大空を見る、この感覚が大事で、それが、その人間の世界となっています。天と地とのなかに人間が存在しているという考え方が東北アジアの基本的な考え方です。中国人も日本人も朝鮮民族も同じです。世界は有限、限りあるというふうに考えるわけです。

西暦一世紀にインドから仏教が入って、極楽とか地獄とか言つても、中国人は全然信用しません。天にある極楽と言われても、地の底に地獄があると言われても、見ることもできない、触ることもできないから信じませんでした。十六世紀に中国にキリスト教が入ってきます。同様に天国がありませんよ、地獄がありますよと言つても、誰も信じませんでした。見えないからというわけでした。

ですから、中国ではキリスト教も仏教も真に理解することは不可能だったのです。それは世界観の違いによるものです。仏教は輪廻の思想で、ぐるぐる回っていますから時間が無限です。時間が無限ということとは空間も無限です。キリスト教も無限です。時間は神がいつかこの世の最期を決める。神の創造した天地創造。いつか最期がある。いつのことか分からない。これに対して、我々東北アジアの民族の思想は徹底的に有限です。空間が有限ですから、時間も有限なのです。

我々は先祖を大事にしますが、その先祖はいつから始まったんだということを言つたりします。先

祖が本当はずっと大昔からいたのなら、究極はミトコンドリアまでいきます。しかし私の先祖はミトコンドリアから始まりますとは言いません。「私の先祖は清和天皇の時代から始まって……」と言つたりします。なにに天皇から始まったというのは我々の感覚なのです。この、誰かはじめて人がいるということに重きをおくことに意味を見出しています。駅の看板に自分のところの店は寛永三年から始まったと書いてあるけれども、正確なところはどうか分からないのが実際ではないでしょうか。天保元年からだとか、そんな嘘を書いてもわからない。でも一応そこから始まったということに誇りを持っているわけですが、このことは有限の感覚としてのなせることで、我々はそういう世界の中に生きているということをまず知ることが必要です。

そういう視点から見えていくと東北アジア文化の基本的な考え方として、人間を中心に据えていることがはっきりと理解できるかと思えます。天国にいる唯一なる神エホバだとか、阿弥陀仏などのような見えないものに対する感覚に、我々は馴染めないものを持っています。あるのは見える世界しかないという考え方です。

◆我々の神々・八百万の神々は人間が中心思想

しかし、我々には多神教の世界があり、そこにあらゆる神仏が存在しているのではないかと言われる方もあるでしょう。しかし、その神仏は少し意味が違います。一神教のキリスト教の場合は全知全能の最高神です。そのような感覚は我々にはありません。どこを探してもありません。神様をバラバラに解体しまして八百万の神々にしているのが、我々の神々です。

八百万の神々はそれぞれ専門分野をもつて、一つのことについてはお出来になる、一つのことには知っておられる、という全知全能ではない一知一能の神仏をつくっています。その一例が天神様です。お子様が大学受験をする場合に、合格しますようにといってお参りに行くところは、菅原道真公をお

祭りする天神様です。天神様は学問の神様です。すると、菅原道真公は学問の神様だから他のことには効きません。商売繁盛、病氣平癒などには天神様にお参りしても効かないということです。私たちが願い事をしに神社にお参りに行く時には、その願い事に効く神社を探しているわけです。何に効く神様か仏様かと聞いている。これは薬師様だから病気に効く、金毘羅さんは交通安全と、我々はいろいろと効能のある神様を探してお参りしているわけです。

要するに我々の神仏は、人間が中心で人間に都合のいい神様をつくっているわけです。すなわち儒教文化圏では人間をどう見るかということが最大の関心事で、人間が中心でありますから、人間の問題を基盤としています。儒教の内容の九九％は人間に関するものです。

五、儒教の人間観

◆人間は全部「ほんくら」

儒教が人間をどう見ているかという点、これは明快です。はっきり申しますと、人間はほとんど全部「ほんくら」だと考えています。これが儒教の見方です。立派な人もいますが、それは例外で、全部と言っていいくらい、ほとんどが「ほんくら」だというのが儒教の人間に対する見方です。儒教は冷静に人間を見ていきます。シビアな見方をしています。

キリスト教は違います。人は全て才能があり、全て優れたものである、という思想です。今日の教育はこのようなものを背景にしていますから、どの子もみんな才能がある立派な子だと。だからその才能を開花させて伸ばすのが教育だとしています。学校の宣伝を見ますと、我が校は個性を伸ばす教育をやっております、才能を伸ばす教育をやっております、と言っていますが、それはキリスト教的な発想で、誇大広告になっている感じがします。

私は三十六年教員をしました。中国学を学びに来た学生の中で、才能があつてこの人間はやっていけるなということを見抜くのに、ものすごく時間がかかりました。才能のある人を見抜くのは難しいことなのです。その中で、「あ、こいつは才能がある。こいつはやっていける」と思える人間は十年に一人です。才能のある人なんて滅多におりません。才能のある人を見つけたことがどんなに難しいことか。また見つけたとしてもそれを伸ばすのはどれほど難しいかということです。全員に才能があつて、その才能を一人ひとり伸ばすなどということは、教師としては絶対できないと言えるでしょう。ただし、才能のない人はすぐ分かります。それは簡単に分かります。才能のある人というのはそんなに見つかるものじゃないのに、どこの学校でも才能教育をするというのは不可能だと私は思っています。

◆儒教的な教育のあり方

人間は「ほんくら」だと言うのが儒教の見方ですが、その「ほんくら」も人間として、生きてゆかねばなりません。そのとき、どのように生きていけば良いのか、生きていくために最小限のことはちゃんと覚えていかなければいけない、というところから教育が始まっています。それが昔から言われている「読み書き算盤」です。「読み書き算盤」という基礎的なことだけを教えればいい。つまり学校としてできる教育は、ほとんどの人間が、誰でも頑張ればそこまではいけるとい程度としてのもので、すなわち「読み書き算盤」ができるところまでを教えるのが教育だと言うわけです。その上は、才能のある人が型を破って新しいものを生み出していけばよいという考え方です。

これが儒教的な教育のあり方です。型を教えるということがどれだけ大事かということも儒教は何度も何度も言っているわけです。学校で教える大事なことをしっかりとやらう、と言うわけです。この型を覚えると子供達は楽です。まずそれだけを覚えたらそれで生きてゆくことができます。今はその

型を十分に教えないから子供は大変です。自分で考えてやらなければいけません。頭の中に何も教えられた内容がないのに、その人間が自由に考えて何ができるでしょうか。子供が、基本もちゃんと教えてもらえずに、めっちゃくちゃをやっているだけの状況が、今日の姿です。これはこうするのですと、基本的なことをしっかりと教えてもらい、学んでいくことがどれほど子供にとってプラスか知れません。

この「型を教える」ということを馬鹿にしている風潮がありますが、「型を教える」のが、我々の伝統的な教育のあり方です。そして、人間としての土台作りに欠かせない教育です。それをすっかり忘れてしまって、自由にやりなさい、自主的にやりなさい、主体的にやりなさい、そんなことばかり言って基礎的な教育を疎かにしていくと、子供は何をして良いのかがわからずノイローゼになっていくのです。

◆蟻の行列にみる人間社会の縮図

もう一例を紹介します。今年の夏、近くの公園で、蟻の行列を見ていました。蟻が巣へ帰り、また巣から出てきます。なぜ巣にわざわざ帰ってまた出て行くのかといいますと、巣に帰ると匂いがついて、働いてきたという証拠になっていると言われています。出て行くときには、帰ってくる蟻とすれ違う時に「おれは働いた」と、そういうサインになるらしいのです。

そこで蟻が入っていく一列、出て行く一列を見ていましたら、入っていく蟻で餌を持って帰ってくるのは十匹に一匹の割合でした。あとは手ぶらで帰っていました。ところが、匂いをつけて「おれは働いたぜ」という顔をして出てきているのではないかと想像できるのですが、あれはまさしく人間社会の縮図です。大体働いているのは一割、あとは働いていない。働くふりをしていただけ。あの働き者の蟻でさえもそうです。人間社会では当然のことで、約一、二割の人ががんばって働いているが、

後の人はあまり働こうとしていない。人間に対するこのような見方が儒教の基本になっています。

そうしますと、この「ほんくら」の人間ばかりの中から、今度は人間の種類を分けていくことになっていくわけです。このような分け方というのはいかなる思想でもあります。例えば、マルクスは、人間には二種類あるんだと。「搾取する奴と搾取される奴がいる」と分けています。人間を二種類に分けていく分りやすい考え方です。また、江戸時代の商人達は、この世には、「金をどうやって儲けるかと朝から晩まで考えている奴」と、「金をどうやって使おうかと朝から晩まで考えている奴」とがいて考えました。確かに真理です。

六、儒教の政治思想

◆他者の幸せを考える人間

それと同じく儒教では、人間には二種類あるということを言っています。どういう種類かと言いますと、「自分の幸福だけを考える人間」と「自分の幸せのみならず、他者の幸せを考える人間」の二種類です。人間は幸せを求め、不幸を求めている人間なんていませんが、自分の幸せだけを求める人間が圧倒的に多い。もちろん自分の幸せを考えることが悪いわけではありません。これはこれで生物として当然の考え方です。自分の幸せを求めることは決して間違ったことではなく、それはそれでいいわけです。大半の普通の人間はそれで幸せな一生を送ればいいのです。自分が幸せということは自分の家族が幸せだという、そういう「型」で生きていくことが、いい一生でしょうが、人間の中には自分の幸せを超越して、他者の幸せを考える人間もいる、と孔子は言っています。

こういうふうには人間は二つに分かれる、と孔子は言っていますが、世の中を見ていると確かに、他者の幸せを考える人間が必ずいます。儒教では、孔子の言葉として論語の中で、「他者の幸せを考え

る人間」を「志のある人間」すなわち「士」というふうに言っています。

そこで孔子は、この「自分の幸せだけを考える人間」を「民」というふうに分け、このような人たちが圧倒的に多いと言っています。こうして人間の種類を「民」と「士」とに分けていますが、この「他者の幸せを考える人間」「志ある人間」は、どういう人間のことを言うのか、どうして他者の幸せを考えるかということを見ていきたいと思えます。

◆「民」は一生懸命に仕事に従事せよ

まず、孔子がいた二五〇〇年前の中国の状況を見ましたら、実証的データはありませんけれども、常識的に考えまして、まず九七〇八%が農民です。農業がもっとも中心の産業です。農民がほとんどだったと思われれます。商業、工業は一部で、そのレベルは低いものであったと想像出来ます。工業は、せいぜいトンカチや鉄を叩く村の鍛冶屋のようなものであったと思われれます。工業に従事する人間は僅かであって、いたとしても兼業農家程度。では、商業はどうかと言えば、これも少ない。人間が歩く以外ない時代です。ものを運ぶことは大変なことでした。自給自足的な生活の中では、多くのものを運んで交流するのはなかなか難しいことが想像できます。川を使ってものを運搬することもあったでしょうが、そこに携わる人々は、全人口から見たら微々たるものであります。すなわち商業・工業人口はほとんどなかった。

圧倒的 대부분は農民であり「民」でした。この人口の大半を占めている農民について論語の中で論じているところはほとんどありません。

さて、そういうふうな農民が圧倒的で、工業・商業はわずかという社会にあつて、他者の幸福を考える職業は何かといたら、この農民を管理する官僚しかなかったということです。官僚という言葉の方は今日の言葉で、論語の言葉で言えば、「為政者」です。今日では、他者の幸福のために働くとい

う職業は沢山ありますが、当時は「為政者」という官僚に限られていました。つまりは行政と言っています。当時は立法・司法・行政という三権分立もありませんし、司法も立法もすべてが行政に入っており、「政治」を行なうということが、他者の幸せのために尽くす職業であつたわけです。儒教の政治思想というのは、要するに他者の幸福のためのもので、他者の幸福のために働くというのが政治である。これはほとんど儒教の定義といつていくらいのものです。この行政に携わるということは、己を捨てても他者の幸福を考えるあり方であつなければならぬというのが原則であります。日本・朝鮮半島・中国という東北アジアにおける政治の基本はそこにありました。

◆「為政者」の資格

ただ問題は、志をもって行政に携わる為政者となるという、この為政者の中身をどうするかということがきわめて大きな問題になるわけです。まず、この為政者、行政に携わる者の必要条件とは何であるかということです。第一に知識がなければならぬということです。その知識の代表は文字でした。当時は文字を知っているということは重要なことで、今でこそ文字なんて誰でも知っていることですが、当たり前のように思われるかもしれませんが、当時、文字を知り、それを使うことができ

る人間というのは限られており、ごく僅かしかいないエリートでした。文字を知っていて、記録を残していくことの重要性は、単に記録を残すというだけではなくて、様々な神々を祭る儀式を司る政治にかかわって行くという重大な役割を負っていました。「政(まつりごと)」というのはまさしくおまつりをするということと、いろいろな「まつりごと」を行なうために記録を残すことはきわめて重要なことでした。たとえば、どこに机をどう置いて、何回礼をするか、どういふものを供えるかとか、記録がなかったら分からなくなりません。あるいは税金の徴収のためとか、記録をするという重要な仕事がありましたので、文字を知ることが行政者になるための絶対

的条件であったわけですから。為政者になるための最低条件としてどうしても文字を学ばなければならなかったのです。

七、儒教を変えた孔子

◆孔子の出自

それでは孔子はどうであったか。孔子の父は農民でした。父が農民だったのに孔子がどうして文字を知ることができたのかということですが、父は再婚でしたが、その再婚した母が「儒」だったからです。「儒」というのは何も孔子が始めたわけではなくて、孔子の時代よりもはるか昔から「儒」という存在があり、祈禱師でもありました。そうした儒集団の中にいた母が文字を知っていたのです。祈禱師には様々な記録が必要で文字が必要でした。儒集団は文字を知っていたインテリで、孔子は小さい時はその母と一緒に過ごし、母に文字を教わったはずですが、これが孔子の武器となったと言えます。

孔子はある時期からお父さんに引き取られ農民の集団に入るわけですが、幼少のころ、母と一緒に生活をしたことが、後の孔子を生んで行く基礎となっていると言えます。儒集団はその中から抜け出して農民のところに行くことはできません。儒集団という特殊な集団を形成していましたが、孔子の両親は別居生活しながら、お父さんが通い婚的な生活であったと想像されます。

◆「儒」と農民の関係

ところで農民と儒とのかかわりについて見ていきますと、農民達にとって一番大事なのは水で、その水がなかったら農業ができません。そうすると、例えば旱魃で雨が降らなかつたら困ります。そこ

で雨乞いという重要な儀式を、この「儒」が行なうわけです。雨乞いをして降雨をお祈りするわけですが、雨乞いという祈りは、結構、科学的な自然の摂理を踏まえています。雨乞いをする場所が決まっており、平地ではしません。谷の窪んだところで行い、谷の底でもすごい量の火を焚き、火を焚くことによって、その焚いた熱が蒸気を作っていく、空気が攪拌され、暑い時は特に上の方に溜まってくる水滴に衝撃を与え水蒸気を発生しやすくしているのです。そうすると雨が降り始め、一度降り始めたら連鎖反応でバツッと降ってくるということです。これは科学的な雨乞いと言えるものです。

この雨乞いの儀式を行なうと、農民達が求めている雨を降らしていくという「需要」に「儒」は応えていくわけです。「需要」の「需」という字は、需要がある、求めるということで、雨を望んでいる農民たちの要望「需」に応えていく役割を担っていたのが「儒」でした。「儒」は、「需」に後から人偏が付いたものと理解してください。

◆「霊降ろし」が祖先供養

このような雨乞いをしたり、霊を降ろしたりすることが、儒の中心的な仕事でした。今でも日本・朝鮮半島・中国人においては霊を降ろすということについてスッと抵抗感なく理解することができ、慰霊祭などを行なうということははっきり申しまして、「霊降ろし」を行なっているということでもあります。我々がお葬式で慰霊を行ないます。先祖供養も慰霊という「霊降ろし」を行なっていることです。明らかにシャマニズムです。「霊降ろし」というのは、我々の日常に溶けこんでおり、感覚に何も違和感なく受け入れられているのであります。

これはキリスト教だつたら認めません。教義的に認めることが出来ず、許せないことです。我々は平然と慰霊という名のもとで「霊降ろし」を行なっているのです。

◆「知」プラス「徳」を兼ね備えて人間づくり

「儒」という集団は大体そういうものでした。そのシャマニズムの「儒」の系統ともう一つの農民の感覚をミックスし、孔子はいろんなことを考えたと思われれます。まず知識が必要であることから、その「知」を学ぶための塾を孔子は開きます。そこに多くの人間が勉強に来ますが、それは将来、みな為政者になるために、勉強に来るわけです。そこでまず教えるのは「知」でした。

学生達は就職に必要な「知」の勉強をしたら、卒業してあとは就職を待っている。良い就職先を推薦してもらうことを切望するわけです。そこで、孔子が推薦状を付けて就職させ、学生達はあちこちの行政マンとなっていきます。これだけでも十分社会のリーダー養成となり、十分に通用する能力をもった人間を放出するのですが、孔子はそれだけでは駄目だ。この「知」だけでは人々を指導することとは出来ない、「知」にプラス「徳」、それは人格的なもの、人間的なもの、そういうものをプラスしていかなければ駄目だと、そういう人格的なものを十分築いてから行政者になれと言いつづけています。「知」に加えて「徳」という人間的な訓練、人格的な陶冶を続けなさいと、弟子達に言い続けていました。

孔子は、知識だけの人間を「小人」と言っています。この知識に加えて人間的なもののトレーニングをしっかりする人間を「君子」というふうに言っています。もともと儒の集団のリーダーを君子と言っていました。そして、その下にいる人間を小人と言っていました。これは歴史的事実です。君子が管理者で、その下に小人がいるという組織集団のなかで孔子は育つていったわけですが、その関係を自分の塾で、概念を変えて、君子と言うのは「知」プラス「徳」を兼ね備えた教養人だと。小人は「知」だけの知識人だと。知識だけだと小人なのだと言っていたわけです。

八、「いのちの連続」を説く儒教

◆親に対しての愛情を「孝」

先ほど多くの人間は「ほんくら」であるという考え方が「儒教」の基本にあるとお話ししましたが、その多くの「ほんくら」である一般の凡夫に対して、「儒教」は、なにを言わんとしたのか、もつとも言いたかったことは何だったのかを確認して「儒教の現代的な意味」をまとめて見たいと思います。

それは、親に対して一生懸命愛情を尽くしなさい、近所の人と仲良くやっていきなさい、そうやって自分たちの生活をちゃんとして生きなさいと言っています。個人個人の小さな幸せというものをちゃんとやっていけということを口酸っぱく言っています。多くの人間はそれでやっていけばよいと言っているわけです。

だけど、中には、自分の幸福だけじゃなくて、他人の幸福までを考えようとする人がいるならば、その者たちは、多数の幸福のためのものである政治をやりなさい、ということをやっているわけです。小さな幸せを否定しているではありません。それはそれちゃんと守っていきなさい、と言っています。

その小さな幸せである家庭を中心としてやっていく時には、その親と子の関係が基盤になるので、まずは祖先を祀るということをきちんとやりなさいと言っています。祖先を守っていくということ、この祖先を祀るのは誰であるかといったら、それは子孫であるわけです。ところが、その祖先の姿が見えません。子孫も遠い未来のその姿は見えません。実際に見えているのは親と子だけで、この親が祖先に繋がり、この子がどんどん子孫に繋がっていくことは理解できるわけです。だから、子孫は連続と続いてきた遠い祖先に対してどのように尽くすかといえは、それは今存在する親に対して愛情を

尽くせということであるわけです。親に対する愛情、これを「孝」と言います。

◆祖先祭祀とは何か

ところで、祖先祭祀とは何かと言えば、亡き人の思い出を語るということなのです。これは「いのちの連続」ということで、これが儒教です。儒教はたくさんいろんなことを言っていますが、一番大事なポイントはこちらにあります。祖先を祀るということは、我々の一番恐怖である「死」というものに対して、安心感を与えているということであって、我々はどんなに頑張っても必ず死にます。死なない人間というのはいません。その死の時に、分らない世界に行くわけですから、まず精神が不安になりますので、その精神を安定させることを教えているわけです。

クリスチャンは天国を信じて天国に行きます。仏教徒は信じて極楽に行きます。そう願っています。それでは儒教はどうするかといったら、亡くなっても後の者が、あなたのことを思い出すという慰霊の意味があるとするのです。慰霊をするというのは亡き人の思い出を語ることであります。慰霊をしてくれるとなると気持ちも安定します。死によって自分は忘れられていくのではなくて、後の子孫の者が思い出して、命日の日であるとか、お盆とか、お彼岸とか、そういう時に思い出してくれることによって精神が安定するわけです。

◆「身は父母の遺体なり」

もう一つ、肉体があります。肉体は解体していきます。これも恐怖です。ところが儒教の重要文獻の中に「遺体」という言葉があります。遺体というのは儒教の古い言葉で、これは「遺した体」ということです。遺した体を遺体といいます。これが今、死体という意味に使われていますが、本来は「遺した体」を意味しており、自分の体は父母の遺した遺体であり、「身は父母の遺体なり」なので

す。そして父母は祖父母の遺体であり、祖父母は曾祖父母の遺した体であるというふうになり、この遺体という概念こそ「いのちの連続」を教える「儒教」の教えそのものです。

自分という個体は悲しくもやがてはいずれ死を迎えて解体します。けれども、自分に血の繋がる者がいれば、己の個体の生命というのはどこかで続いているわけで、今日流に言えばDNAが伝わるわけです。個体は解体するけれども肉体としての生命は生き残っているわけで、そこに安心がある。肉体は潰れていくけれどもどこかに残っていると。だから自分に子供がなければ甥や姪を愛しなさいと儒教では言います。自分に父がなければ叔父を愛しなさい。血の繋がっている者を愛せと、こういうことを徹底して言うわけです。そのように考えていくことによって肉体の安定も行われる。これが儒教です。そういう考えにおいて精神安定も図られ、肉体も安定し、「死」の恐怖感も少なくなる。キリスト教はキリスト教で死に対する恐怖を取り除こうとします。仏教も同じです。多くの宗教がそうです。死の恐怖を和らげるように言っているわけで、儒教は家で行う宗教とも言えるもので、教会もお寺もありませんが、死の恐怖に対して「大丈夫ですよ、大丈夫ですよ」と「いのちの連続」「いのちのつながり」を教え、「慰霊を行なうと安心ですよ」と、この小さな家庭の幸せの根本について儒教は教えていると言えます。

◆まず親を愛し、それから兄弟を愛する

ですから、「ほんくら」は「ほんくら」で、小さな幸せを持ち、そのそれぞれの幸せを持って生きて行けというのが儒教です。儒教は難しいことを言っています。ただし、その中で、余裕のある者は他者の幸福を考えろと言ひ、そうした志のある人間は君子の道を歩めと言っているのです。

儒教の言っていることはものすごく簡単です。一番愛するのは一番親しい親。親に対して一番愛情は多いし、量も多い。そして自分から遠ざかっていくに従って愛の量が減っていきます。まず親を愛

し、それから兄弟を愛するとか、叔父叔母を愛するとか、遠い親戚の叔父さんを愛するとか、友達を愛するとか、次第にその距離が遠くになると愛する量が減っていくわけです。遠く存在になれば、愛することの必要性を全く感じないということになるのはあたり前のことであるわけです。

キリスト教のように「万民を平等に愛し、神のような心を持って」というのはできないというのが儒教の考えです。儒教では博愛ということは困難としています。博愛じゃなくて、己の近い者を出来るだけ一生懸命愛しなさい、それでいいのですよ、というわけです。誰かは必ず誰かに愛されているでしょう。誰かは誰かによって愛されているから、何も全員を一生懸命愛さなくても、それぞれが皆たがいに愛し合っているから帳尻が合うということですよ。

◆愛の深さ、悲しみの深さを決めた「礼」

愛の量についても儒教は言っています。愛の反対は悲しみ。悲しみの最高は親の死です。親の死が一番悲しいものですから、悲しみの量もまた最高になります。人間関係の距離によって、その悲しみはだんだん減っていくわけです。兄弟の死、叔母の死、友人の死。二キロ先のおじさんは関係ないということになります。

こうした愛の深さ、悲しみの深さを決めたのが「礼」です。だから、親に対する悲しみが最高だから、親に対して、親が亡くなったとき最高の喪に服す。あとは減っていくわけです。ずっと二キロ先のおじさんの時は素通りするだけということになっているわけです。儒教で言う「礼」も、徹底的に人間的です。自分に関係のある人を一生懸命愛しなさいと、これほど分かり易いことないでしょう。

だから儒教では、「孝」というのを一番大事にしたわけです。それは人間としての第一の基本、親が生きている時に一生懸命愛しましょうという親孝行です。基本はたったこれだけのことです。これに儒教の全てが語りつくされています。根本的なところは「いのちの連続」を大事にしましょう、と

いうことです。

私の命は祖先から伝わった命です。自分は一時預かっているだけです。A君もB子さんもそれぞれ祖先からの命を預かっているわけで、A君を殺すということは、A君という個体の消滅だけじゃなく、その背後にある「いのちの連続」で繋がってきた命を絶つという重大な犯罪になるわけです。それを思うと人を殺すということが、どれほど悪であることか、きわめて重大なことかを教えてくださいなればなりません。ただ「命を大切にしましょう」とだけしか言っていないと、小さな子供には分かりません。命を大切にしようというその命がどんな命かということを教えないといけない。命というのは歴史や文化を背景にした「いのち」であり、広く、また歴史的にも我々が住む東北アジアの伝統的な「いのち」であることを教えるべきです。

◆仏壇に祈りを捧げる日本の精神文化

我々の日常生活の中で、特に家庭の中で、どう「いのち」を意識していくか。これ意識せしめるのは何かと言ったら、日本には素晴らしいものがあります。それは仏壇です。お仏壇にはご本尊さんがいらっしやるけれども、その下に並んでいるお位牌というのは祖先、近親者、亡き人の「人形」です。これが血のつながりというものを強烈に意識させ、その思いを与えるわけです。

ですから仏壇をもっと大事にして、お仏壇に祈りを捧げることによって家族、一族の強い絆が生まれるわけです。そして、日々その前に座ってお勤めをします。また、家族の新たな旅立ちの時や精神的なケジメをつける時には仏壇にお参りをしています。我が家も、娘が嫁入りする時には仏壇にお参りをして、ご祖先に報告をしています。また、子供が大学受験する時も仏壇の前で出陣式をいたしました。合格したら祝勝会も仏壇に報告して行ないました。節目節目でお仏壇の前に集まるということが、ささやかな私の家の家族のつながりになっています。

仏壇の前でそんなことをすると特定宗教の儀式を推奨することになる、そのような教育をしようと学校の教育基本法に反する、憲法では特定宗教のことを教えてはいけないということを叫ぶ人たちがいますが、今の日本で欠けている家族の絆を強くしていくためには、仏壇の前に座ればいいのです。そこで一つの血のつながり、家族の絆を意識し合うということです。今の日本人が忘れていている家庭教育の基盤ではないでしょうか。

◆国家が家々の祭祀を定める意味

親が亡くなると相続という問題が起ります。相続の大部分である土地だとか財産だとかは遺産分割協議をして、この土地はA、このお金はBというふうに遺産分割をします。これらが無事に終わつたとしても、そのあとに残るのは祖先祭祀の問題としての「祭祀財産」の取り扱いです。祖先の祀りを誰がするかということが後回しになっています。祖先を祀るということを最優先すべきですが、今日忘れられてきている風潮にあるのは誠に悲しき現象ではないでしょうか。

さて日本の民法は、この祭祀の承継はどうするかということをはっきり書いています。まずどうするかという話し合いで決めることになっています。慣行によるところがほとんどで、例えば長男が受け継ぐとか、あるいは墓地に近いところに住んでいるものがするとか、そういう慣行でまず決めます。ところがいろんな事情で、話し合いによる調整がうまく運ばない時には、「家庭裁判所がこれを決定する」と書いてあります。これはすごいことです。

家庭裁判所というのは国家権力です。最後に国家が家々の祭祀のありかたを決めるのです。国家の力よっての定めです。そうしますと、特定宗教の話だとか、特定の宗教活動だとか、そんなこと関係ないわけで、家の祭祀は国家が決める。家々の祭祀を家族が必ずちゃんと守るように、と国家が裁判所において決めるということです。

このことを日本の学校で教えているところはまずないでしょう。仏壇を含めた祖先祭祀ということをやっぱり家族はちゃんとすべきです。最終的に祭祀の承継を家庭裁判所が決めるということの意味は、いかに祖先祭祀が「いのちの連続」における重要な問題であるかということを示していると思います。財産分与で必死に、あの土地が欲しい、この金が欲しい、定期預金なんぼあって、そんなことばかりを争い、仏壇となれば皆知らん顔という現実が今日の社会のようですが、そんな中において、私は儒教の現代的な教えの普及とその必要性とを痛感しております。

(編集者注 本稿は、平成十七年四月十六日に開催されたモラロジー研究所道徳科学研究センター「公開講演会」の内容を元に書き下ろされたものである。)